



企業家の日常的実践についての理解：企業家ストレスの生成と対処に着目して

堀尾， 柁人

(Degree)

博士（経営学）

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2025-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8835号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490060>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文審査要旨

氏名 堀尾 柁人

論題 企業家の日常的実践についての理解
：企業家ストレスの生成と対処に着目
して

審査 令和6年3月

神戸大学

論文内容の要旨

本論文の目的は、企業家の日常的実践について理論的・経験的な分析を行い、明らかにすることにある。企業家が感じるストレスを典型的事例とすることで、企業家の感情と自己認識に導かれ、周囲との相互作用を行う企業家の実践の様相が明らかにされた。企業家活動と企業家の生の存続が不可分なものであるとの前提に立ち、検討を通してこれらへの理解を更新するだけでなく、実務上の示唆として企業家本人の自己理解と他者による企業家の理解を促進することが目指された。ここでの理解とは、当人が存在する社会的世界に含まれる価値、あるいは生い立ちの中で形成された信念や動機を含めた行為の理解を指す。また、本論文では、企業家における逸脱性、差異化志向性、接続不可能性を理解することの困難についての克服あるいは改善が試みられた。

本論文での分析対象は、企業家の日常的実践である。これは、企業家が活動と生存を存続させるために、自身の社会的世界の中で省察的实践を日常的に繰り返していくことを意味する。本論文では、企業家の日常的実践を構成する主な三つの概念として、感情、自己、相互作用に着目し、これら三つの概念におけるこれまでの理解の更新が目指された。こうした目的に即して好適な事例として本論文で設定されたのが、企業家ストレスである。これは、当人の心理的資源に対する負担の超過や脅威として評価される、人間と環境との間の特定の関係を意味する。

第2章では、企業家ストレス研究も含めた先行研究のレビューが行われた。分析対象である企業家の日常的実践だけでなく、近年のアントレプレナーシップ研究にて企業家の心理的健康に着目した研究が増加傾向にある中で、研究蓄積から継承できる部分と残された課題の部分が整理された。特に、心理的ストレスを提唱したラザルスたちの研究で重要視された、当人が当人の心理的資源と環境を関係付けて評価する点、評価の際に当人の重要視することを起点にする点、さらには感情を用いて表現する点が再評価された上で、それらの点を組み込んだ概念枠組みと方法についての、著者による検討が見られた。

第3章では、言語的アプローチと臨床的アプローチという本論文の特徴的な方法と、本論文で事例として取り上げる三名の企業家のプロフィールに関する説明に加え、彼らとの関わり合いの手続きについて、具体的に論じられた。

第4章から第6章までの内容は、研究課題に対して、企業家の事例研究の分析結果を示したものである。まず、第4章では、主に企業家活動と企業家ストレスを関係づけながら、

企業家ストレスの内容を企業家自身の感情表現に即して分析された。特に、事業化と組織化に関連する四つの企業家活動と、六つの企業家ストレス内容との関係が示された。さらには、感情について、未来、現在、過去という時制に関連付けた整理が行われた。

第5章では、企業家の個人的な意味生成(personal meaning)の内容に加え、それと企業家ストレスとの関連性について検討された。意味生成の内容には、三氏に共通して、自己決定を選好する点と最終意思決定者としての責任感の2点を重視していることが見られた。その一方で、起業する以前の経験や価値観においては各氏で異なる部分が見られ、起業後の活動の中で異なる経験や状況解釈により、個別で異なる意味が生成されていた。これらの内容にはストレスに対する緩和と強化の作用が見られたが、そのことから、企業家の形成した自己には、生の存続に適応することへの順機能と逆機能の両面が含まれていることが含意される。

第6章では、企業家が企業家ストレスにどのように対応し、どのような結果に至ったかが示した。企業家の対応には、事前の予防と事後の対処の二つが見られた。事前の予防は、認知や意思決定上のものと起きた出来事の解釈に対する自己規律に分類された。事後の対処においては企業家自身によって直接的な解消が難しく、それゆえ企業家ストレスの個人的な意味生成において中心的な位置を占めていた、自己決定を選好する点と最終意思決定者としての責任感に、事前の予防が作用していたことが発見された。さらには、日常的に省察し活動を修正する活動も発見された。

論文審査の結果の要旨

本論文の理論的貢献としては、自らを取り巻く社会的世界への企業家の日常的な向き合い方について、先行研究にない新たな理解を示した点にある。企業家の日常的実践を「企業家活動と企業家の生の存続との両立」として捉え、社会的世界との相互作用を円滑にも難しくもする、社会的世界と企業家自身の関係を取り持つ対象に含まれる感情や自己といった部分を、相互に関係付けながら、日常的実践の全体像を新たに示した。ストレスという、直感的には理解しやすい、しかし実際には多義的で複雑な概念を手がかりとすることで、企業家が直面する、あるいは内包する事象、さらには事象への向き合い方の成り立ち、さらにはそうした向き合い方が成り立つプロセスを、詳細かつ正確に描き出した。企業家

の生きている社会的世界に含まれる複数のコントロールの性質，さらには日常的な省察や意味生成を通じた日々の活動，そこにおける自己調整は，企業家について従来顧慮されてこなかった新たな像を示している。こうした理論的な視座は，標榜するのは容易であるが，一定の体系化にまで到達することは容易ではない。

企業家研究，および経営学研究に対する方法的な貢献も特筆すべきである。本論文の著者は，およそ3年にわたる調査対象者との関わりを通じて，企業家の日常的実践の体系を描き出した。調査対象者である企業家の活動に関与し，彼らとの信頼関係の中でさまざまな価値ある情報を引き出したり，共同生成したりすることにおいて，優れた成果を残した。ストレスという言葉を経済学を媒介とした臨場的な対話を通じて，感情に含まれるコミュニケーション機能とシグナル機能を見出したことは，研究者，研究対象である企業家，本論文の読者という三者の間での，企業家の生を巡る詳細な状況理解を共有した。企業家による自己理解の重要性を踏まえると，それに至る社会的プロセスを実際の体験を踏まえて導出したことの価値は大きい。

ただし，本論文にはいくつかの限界や課題が残されている。例えば，本論文から導出された概念や理解が他の企業家，とりわけ会社設立直後の企業家，男性企業家以外においてどれだけ当てはまるのかについて検討の余地がある。また，研究者と研究対象の間の再帰的な関係について，本論文の特異性と普遍性がどこにあるのかについて，未解明の部分が残されており，研究における科学性と物語性の境界が定かではない。また，企業家の生に着目するためにストレス概念に着目することで，かえって企業家の生全体を捉えられなくなる可能性があったが，その点についての明確な言及がなかった。企業家の生の現場に臨み，それに関するさまざまな概念や概念間関係を発見し，整理したものの，その一部において先行研究の観点に引きずられた部分もあり，本論文の真にオリジナルな部分が少しぼやけてしまっている点もあった。

ただし，こうした限界や課題は，将来の研究を通じた克服が可能なものであり，また，すでに述べた本論文が示す理論的および方法的な価値を損ねるものではない。今後は，本論文から導出した概念や理解の方法を用いて，属性や事業内容が異なる企業家，あるいは企業家の生に関わるストレス以外の概念を検討することにより，そうした検討を通じて本論文で導出された概念や理解を修正することにより，企業家活動と企業家の生の存続との両立可能性についてのより包括的な描写が可能になるだろう。本論文の著者による，更なる研究の展開に期待したい。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

令和 6 年 3 月 5 日

審査委員	主査	准教授	江夏幾多郎
		教 授	宮尾 学
		教 授	鈴木 竜太